

リーディングシアター

グスコーブドリの伝記

原作／宮沢賢治

戯曲／黒岩力也

A

ブドリ 赤ひげの男

B

目の鋭い男 てぐす飼いの男 背の高い男 となりの男 そこの人

クーボー大博士 学生 ペンネン老技師 百姓 病院の小使

B 宮沢賢治、作。

A グスコープドリの伝記。

B 一、森。

A グスコープド리는、イーハトーヴの大きな森のなかに生まれました。おとうさんは、グスコーナドリという名高い木こりで、どんな大きな木でも、まるで赤ん坊を寝かしつけるようにわけなく切ってしまう人でした。

B ブドリにはネリという妹があつて、二人は毎日森で遊びました。ごしつごしつとおとうさんの木を挽《ひ》く音が、やっと聞こえるくらいな遠くへも行きました。二人はそこで、木いちこの実をとってわき水につけたり、空を向いて

かわるがわる山鳩《やまばと》の鳴くまねをしたりしました。おかあさんが、家の前の小さな畑に麦を播《ま》いでいるときは、二人は道にむしろをしいて座つて、ブリキかんで蘭《らん》の花を煮たりしました。

A ブドリが学校へ行くようになりますと、森はひるの間たいへんさびしくなりました。そのかわりひるすぎには、ブドリはネリと一緒に、森じゅうの木の幹に、赤い粘土や消し炭で、木の名を書いてあるいたり、高く歌つたりしました。

そして、ブドリは十になり、ネリは七つになりました。

B ところがどういうわけですか、その年は、お日さまが春から夏に白くて、五月になってもたびたび曇《みぞれ》が

ぐしゃぐしゃ降り、七月の末になってもいつこうに暑さが来ないために、果物も花が咲いただけで落ちてしまったのです。

そしてとうとう秋になりましたが、みんなで普段たべる一番たいせつなオリザという穀物も、一つぶもできませんでした。

A ブドリのおとうさんもおかあさんも、冬になってからは何べんも大きな木を町へそりで運んだりしたのですが、いつもがっかりしたようにして、わずかの麦の粉などもって帰ってくるのです。

B それでもどうにかその冬は過ぎて次の春になり、畑に種も播かれましたが、その年もまたすっかり前の年のとおりでした。

そして秋になると、本当の饑饉《ききん》になってしまいました。もうそのころは学校へ来る子供もまるでありませんでした。

A ブドリのおとうさんもおかあさんも、すっかり仕事をやめていました。

B そしてかわるがわる町へ出て行って、やっと少しばかりの黍《きび》の粒など持って帰ることもあれば、なんにも持たずに帰ってくることもありました。

A みんなは、「こならの実や、葛《くず》やわらびの根や、木の柔らかな皮やいろんなものをたべて、その冬をすくしました。

けれども春が来た頃は、おとうさんもおかあさんも、何かひどい病気のようでした。

ある日おとうさんは、じつと頭をかかえて、いつまでもいつまでも考えていましたが、にわかに起きあがって、よろよろ家を出て行きましたが、まっくらになっても帰って来ませんでした。

B 次の日の晩方になって、おかあさんはにわかに立って、わたしはおとうさんをさがしに行くから、お前たちはうちにいてあの戸棚にある粉を二人ですこしずつたべなさいと言って、よろよろ家を出て行きました。二人はそこらを泣いて回りました。まっくらな森の中へはいつて、わき水のあるあたりをあちこちうろろ歩きながら、おかあさんを一晩呼びました。星がちらちらひかり、鳥はたびたびおどろいたように飛びましたけれども、どこからも人の声はしませんでした。

A とつとつ二人はぼんやり家へ帰って中へはいりますと、眠ってしまいました。ブドリが目をさましたのは、その日のひるすぎでした。おかあさんの言った粉のことを思い出して戸棚をあけて見ますと、なかには、袋に入れたそば粉やこならの実がまだたくさんはいつていました。ブドリはネリをゆり起こして二人でその粉をなめ、炉に火をたきました。それから、二十日ばかりぼんやり過ぎましたら、ある日戸口で、

B)目の鋭い男(にんにちは、だれかいるかね。

A と言ったものがありました。ブドリがはね出して見ますと、それは籠《かご》をしようた目の鋭い男でした。

その男は籠から丸い餅をとり出して言いました。

B(目の鋭い男)私はこの地方の飢饉《ききん》を助けに来たものだ。さあなんでも食べなさい。

A 二人がこわこわたべはじめますと、

B(目の鋭い男)お前たちはいい子供だ。わしといっしょについておいで。もとも、わしも二人はつれて行けない。

おい女の子、ニョにいてもたべるものがないんだ。おじさんといっしょに町へ行こう。毎日パンを食べさせてやるよ。

A そしてぶいっとネリを抱きあげて、せなかの籠へ入れて、そのまま、

B(目の鋭い男)おおほいほい。おおほいほい。

A と、どなりながら、家を出て行きました。ネリはおもてで泣き出し、ブドリは、(ブドリ)どるぼっ、どるぼっ。

と泣きながら追いかけてましたが、男はもうずっと向こうの草原を走っていて、ネリの泣き声がかすかに

聞こえるだけでした。ブドリは、泣いてどなって森のはずれまで追いかけてましたが、

とつとつ疲れてばったり倒れてしまいました。

B 二、でぐす工場。

A ブドリがぶつと目をひらいたとき、いきなり頭の上で声がありました。

B(でぐす飼いの男) やつと目がさめたな。まだお前は飢饉《ききん》のつもりかい。起きておれに手伝わないか。

A 見るとそれは茶色なきのこしゃつぽをかぶって外套にシャツを着た男でした。

ブドリ(もう飢饉は過ぎたの？ 手伝って何を手伝うの？)

B(でぐす飼いの男) 網掛けさ。

A(ブドリ) ニ、ニ、網を掛けるの？ 網をかけて何にするの？

B(でぐす飼いの男) でぐすを飼うのさ。

A 見るとすぐブドリの前の栗の木に、二人の男がはしごをかけて登っていて、一生懸命何か網を投げたり、

それを操《あやつ》ったりしている様でしたが、網も糸もいつこう見えませんでした。

ブドリ(あれででぐすが飼えるの？)

B(でぐす飼いの男) 飼えるのさ。うん、うん、でもまだな。おい、縁起でもなげぞ。

てぐすも飼えないと「ろにどうして工場なんか建てるんだ。飼えるともさ。

現におれをはじめたくさんのものが、それでくらしを立てているんだ。

A(ブドリ)そつですか。

B(てぐす飼いの男)それに「の森は、すっかりおれが買っているんだから、「で手伝うならいいが、

そつでもなければ「かへ行ってもらいたいな。

もつもお前は「入行つたつて食うものもなかるつぜ。

A(ブドリ)そんなら手伝うよ。けれどももつとして綱をかけるの？

B(てぐす飼いの男)それはもちろん教えてやる。「つをね。さあ、「の綱をもって上のぼつて行くんだ。さあ、のぼつてらん。

A 男は変なまりのようなものをブドリに渡しました。ブドリはしかたなくそれをもっては「ことりついて登って行きました。

B(てぐす飼いの男)もつと登るんだ。もつと、もつとさ。そしたらもつきの綱を投げてらん。栗の木を越すよつこさ。

そいつを空へ投げるんだよ。

A ブドリは力いっぱいそれを青空に投げたと思いましたが、にわかにお日さまが真っ黒に見えて下へおちました。

そして男に受けとめられていたのです。男はブドリを地面におろしながらぶりぶりおこり出しました。

B(てぐす飼いの男)お前もいくじのないやつだ。なんといっふにやぶにやだ。おれが受け止めてやらなかったら

お前は今ごろは頭がはじけていたろう。おれはお前の命の恩人だぞ。

さあ、こんどはあっちの木へ登れ。も少したつたら「はんもたへさせてやるよ。

A 男はブドリへ網を渡しました。ブドリは次の木へ行つて網を投げました。

B(てぐす飼いの男)よし、なかなかじょうずになった。

A 男は網を十ばかり出してブドリに渡すと、すたすた向こうへ行つてしまいました。ブドリはまた三つばかりそれを

投げましたが、息がはあはあして、からだがだるくてたまらなくなりました。もう家へ帰ろうと思つて行つて見ますと、

家にはいつか赤い煙突がついて「イーハトーヴてぐす工場」という看板がかかっているのです。

そして中から、さっきの男が出て来ました。

B(てぐす飼いの男)さあ「でも、たぐすものをもつてきてやつたぞ。これを食べて暗くならないうちにもう少しかせぐんだ。

A(ブドリ)ぼくはもついでだよ、うちへ帰るよ。

B) てぐす飼いの男(うちつていつのはあす)か。あすはお前のうちじゃない。俺のてぐす工場だ。

あの家も「森もみんなおれが買ってあるんだからな。」

A) ブドリはもうやけになって、だまってその男のよこした蒸しパンをむしゃやむしゃたべて、また網を十ばかり投げました。

その晩ブドリは、昔のじぶんのうち、今はてぐす工場になっている建物のすみに、小さくなってねむりました。

さっきの男は、三四人の知らない人たちとおそくまで炉ばたで火をたいて、何か飲んだりしゃべったりしていました。

次の朝早くから、ブドリは森に出て、きのこのようにはたらきました。

B) それから一月ばかりたつて、森じゅうの栗の木に網がかかってしまいますと、てぐす飼いの男は、

「こんどは栗《あわ》のようなものがいっぱいいた板きれを、どの木にも五六枚ずつるさせました。

そのうちに木は芽を出しました。すると、木につるした板きれから、たくさん小さな虫が枝へはいあがって行きました。

ブドリたちはこんどは毎日薪《たきぎ》とりをさせられました。栗の木が花をつけるころになりますと、

あの板からはいあがって行った虫も、栗の花のような色とかたちになりました。

A) そして森じゅうの栗の葉は、まるで形もなくその虫に食い荒らされてしまいました。虫は大きな黄いろな繭を、

網の目ごとにはけはじめました。てぐす飼いの男は、その繭を籠に集めさせました。

それを片っぱしから鍋に入れてぐらぐら煮て、手で車をまわしながら糸をとりました。

夜も昼も糸車をまわして糸をとりました。

B 二つして黄いろな糸が小屋に半分ばかりたまつたころ、外に置いた繭からは、大きな白い蛾《が》が飛びだしはじめました。

てぐす飼いの男は、じぶんも一生けん命糸をとりましたし、野原からも人を連れてきて働かせました。

A 蛾は日ましに多く出るようになって、森じゆうまるで雪でも飛んでいるようになりました。

ある日、荷馬車が来て、できた糸をみんなつけて、みんなも町へ帰りはじめました。

荷馬車がたつとき、てぐす飼いの男が、ブドリに言いました。

B(てぐす飼いの男)おい、お前の来春まで食うくらゐのものは家の中に置いてやるからな。

それまで二で森と工場の番をしているんだぞ。

A てぐす飼いの男は荷馬車についてさっさと行ってしまいました。ブドリはあとへ残りました。

うちの中はきたなくて嵐のあとのようでしたし、森は荒れはてて山火事にでもあつたようでした。

次の日。ブドリは、てぐす飼いの男がいつも座っていた所から古いボール紙の箱を見つけました。

B 中には十冊ばかりの本がぎっしりはいつておりました。開いて見ると、てぐすの絵や機械の図がたくさんある、まるで読めない本もありましたし、いろいろな木や草の図と名前の書いてあるものもありました。

ブドリはいつししょうけんめい、その本のまねをして字を書いたり、図をつつしたりしてその冬を暮らしました。

A 春になりますと、またあの男が六七人のあたらしい手下を連れて、たいへん立派ななりをしてやって来ました。

そして次の日からすっかり去年のような仕事が始まりました。

そして網はみんなかかり、板もつるされ、虫は枝にはい上がりました。

B ある朝、にわかにくらぐらぐらと地震がはじまりました。

A それからずつと遠くでどーんという音がしました。

B しばらくたつと日が変にくらくくなり、こまかな灰がばさばさ降って来て、森はいちめんにもっ白になりました。

A ブドリたちが木の下にしゃがんでいましたら、てぐす飼いの男があわててやって来ました。

B(てぐす飼いの男)噴火だ。噴火がはじまったんだ。てぐすはみんな灰をかぶって死んでしまった。みんな早く引き揚げてくれ。

ブドリ、お前『』にいたかったらいつでもいいが、あぶないからな。お前も野原へ出て何かかせぐほうがいいぜ。

A そう言ったかと思うと、もう走って行ってしまいました。ブドリが工場へ行って見たときは、もうだれもおりませんでした。そこでブドリは、みんなの足跡のついた白い灰をふんで野原のほうへ出て行きました。

B 三、沼ばたけ。

A ブドリは、灰をかぶった森の間を、町のほうへ歩きつづけました。灰はまるで吹雪のようでした。けれども野原へ近づくほど、だんだん少なくなつて木も緑に見え、とうとう森を出切ったとき、ブドリは思わず目をみはりました。野原は目の前から、遠くのまつしろな雲まで、美しい桃いろと緑と灰いろのカードでできているようでした。

B 桃色のせいの低い花が咲いていて、蜜蜂が花を渡つてあるいていましたし、緑いろの小さな穂を出して草がぎっしりはえ、灰色は浅い泥の沼でした。

A せまい土手でくぎられ、人は馬を使って泥の沼を掘り起こしたりかき回したりしてはたらいっていました。

B ブドリがしばらく歩いて行きますと、二人の人が、大声で何か言い合っていました。赤いひげの男が言いました。

A(赤ひげの男)なんでもかんでも、おれは山師張るときめた。

B すると、もう一人の背の高いおじいさんが言いました。

(背の高い男)やめろって言ったらやめるもんだ。そんなに肥料うんと入れて、糞《わら》はとれるたって、

実は一粒もとれるもんでない。

A(赤ひげの男)うんにや、おれの見込みでは、今年は今までの三年分暑いに相違ない。一年で三年分とって見せる。

B(背の高い男)やめろ。やめろ。やめろっつら。

A(赤ひげの男)うんにや、やめない。花はみんな埋めてしまったから、こんどは豆玉を六十枚入れて、それから鶏の糞《かえし》、

百駄《ひやくだん》入れるんだ。こっぴどくなればささげのつるでもいいから、手伝いに頼みたいもんだ。

B ブドリは思わず近寄っておじぎをしました。

A(ブドリ)そんならぼくを使ってくれませんか。

B すると二人は、ぎよつとしたように顔をあげて、あぐに手をあててしばらくブドリを見ていましたが、

赤ひげの男がにわかに笑い出しました。

A(赤ひげの男)よしよし。お前に馬の指竿《させ》とりを頼むからな。すぐおれについて行くんだ。

それではまず、のるかそるか、秋まで見ててくれ。さあ行こう。ほんとに、ささげのつるでもいいから頼みたい時だな。

B 赤ひげは、ブドリとおじいさんにかわるがわる言いながら、さつさと先に立って歩きました。あとではおじいさんが、

(背の高い男)年寄りの言つこと聞かないで、いまに泣くんだな。

とじぶちやきながら、しばらくにつちを見送っているようすでした。それからブドリは、

毎日毎日沼ばたけへはいつて馬を使って泥をかき回しました。

A 一つの沼ばたけがすめばすぐ次の沼ばたけへはいるのでした。一日がとても長くて、風が何べんも吹いて来て、

近くの泥水に魚のうろこのような波をたて、遠くの水をブリキいろにして行きました。

B そらでは、毎日甘くすっぱいような雲が、ゆっくりゆっくりながれていて、それがじつにうらやましそうに見えました。

A ニこうして二十日《はつか》ばかりたちますと、やっと沼ばたけはすっかりどろどろになりました。

次の朝から主人は、あちこちから集まって来た人たちといっしょに、その沼ばたけに

緑いろの檜《やり》のようなオリザの苗をいちめん植えました。それが十日ばかりで済むと、

今度はブドリたちを連れて、今まで手伝わってもらった人たちの家へ毎日働きにでかけました。

B それもやっと一まわり済むと、またじぶんの沼ばたけへ戻って来て、毎日毎日草取りをはじめました。

草取りが済むとまたほかへ手伝いに行きました。ところがある朝、主人はブドリを連れて、じぶんの沼ばたけを通りながら、にわかに「あつ」と叫んで棒立ちになってしまいました。

A (赤ひげの男) 病気が出たんだ。

(ブドリ) 頭でも痛いんですか。

(赤ひげの男) おれでないよ。オリザよ。それ。

B 主人は前のオリザの株を指さしました。ブドリはしゃがんで調べてみますと、なるほどどの葉にも、今まで見た事のない赤い点々がついていました。主人はだまってしおしおと沼ばたけを一まわりしましたが、家へ帰りはじめました。

A ブドリも心配してついて行きますと、主人はだまって、そのまま板の間に寝てしまいました。
するとまもなく、主人のおかみさんが表からかけ込んで来ました。

B (おかみさん) オリザへ病気が出たというのはほんとうかい。

A(赤ひげの男) ああ、もうだめだよ。

B(おかみさん) どうにかならないのかい。

A(赤ひげの男) だめだろう。すっかり五年前のとおりだ。

B(おかみさん) だから、あたしはあんたに山師をやめろといったんじゃないか。おじいさんもあんなにとめたんじゃないか。

A おかみさんはおろおろ泣きはじめました。

B すると主人がにわかになんげになんげになってむっくり起き上がりました。

A(赤ひげの男) よし。イーハトーヴの野原で、指折り数えられる大百姓のおれが、こんなことで参るか。よし。来年こそやるぞ。

ブドリ、おまえおれのうちへ来てから、まだ一晩も寝たいくらい寝たことがないな。さあ、五日でも十日でもいいから、

ぐうというくらい寝てしまえ。おれはそのあとで、あすこの沼ばただけでおもしろい手品をやって見せるからな。

その代わり、「としの冬は、家じゅうそばばかり食うんだぞ。おまえそばはすきだろうが。

B それから主人はさつさと帽子をかぶって外へ出て行ってしまいました。ブドリは主人に言われたとおり

納屋《なや》へはいつて眠ろうと思いましたが、なんだかやっぱ沼ばだけが苦になってしかたないので、行って見ました。

すると、主人がたつた一人腕組みをして土手に立つておりました。沼ばたけには水がいっぱい、オリザの株は葉をやっと出しているだけ、上にはぎらぎら石油が浮かんでいました。主人が言いました。

A(赤ひげの男)いまおれ、「この病気を蒸し殺してみるところだ。

(ブドリ)石油で病気の種が死ぬんですか。

(赤ひげの男)頭から石油につけられたら人だって死ぬだ。

B その時、隣の沼ばたけの持ち主が、息を切ってかけて来て、どなりました。

(となりの男)なんだって油など水へ入れるんだ。おれのほうへはいつてるぞ。

A(赤ひげの男)オリザへ病気がついたから、油など水へ入れるのだ。

B(となりの男)なんだってそんならおれのほうへ流すんだ。

A(赤ひげの男)水は流れるから油もついて流れるのだ。

B(となりの男)そんならなんだっておれのほうへ水「ないように水口《みなくち》とめないんだ。

A(赤ひげの男)あす「はおれのみな口でないから水とめないのだ。

B となりの男は、かんかんおこってしまったてもう物も言えず、いきなりがぶがぶ水へはいつて、

自分の水口に泥を積みあげはじめました。主人はにやりと笑いました。

A(赤ひげの男)あの男むずかしい男だな。こつちで水をとめると、とめたといつておるからわざと向こつにとめさせたのだ。
あすこさえとめれば今夜じゆうに水はすっかり草の頭までかかるからな、さあ帰ろう。

B 主人はさきに立つてすたすた家へあるきはじめました。

A 次の朝ブドリはまた主人と沼ばたけへ行ってみました。主人は水の中から葉を一枚とってしきりにしらべていましたが、
やっぱり浮かない顔でした。

B その次の日もそうでした。その次の日もそうでした。その次の日もそうでした。その次の朝、
とうとう主人は決心したように言いました。

A(赤ひげの男)さあブドリ、いよいよ「入蕎麦播」そばま《きだぞ。おまえあすこへ行って、となりの水口こわして来い。

B ブドリは、言われたとおりにわして来ました。石油のはいった水は、恐ろしい勢いでとなりの田へ流れて行きます。

A きつとまたおこってくるなと思つていますと、ひるごろ例のとなりの持ち主が、大きな鎌をもってやってきました。

B(となりの男)やあ、なんだってひとの田へ石油ながすんだ。

A(赤ひげの男)石油ながればなんだって悪いんだ。

B(となりの男)オリザみんな死ぬでないか。

A(赤ひげの男)オリザみんな死ぬか、オリザみんな死なないか、まずおれの沼ばたけのオリザ見なよ。

今日で四日頭から石油かぶせたんだ。それでもちやんと「の」とおりでないか。

赤くなつたのは病気のためで、勢いのいいのは石油のためなんだ。おまえの所など、

石油がただオリザの足を通るだけでないか。かえつていいかもしれないんだ。

B(となりの男)石油「やし」になるのか。

A(赤ひげの男)石油「やし」になるか、知らないが、とにかく石油は油でないか。

B(となりの男)それは石油は油だな。

A 男はすっかりきげんを直してわらいました。水はどんどん退《ひ》き、オリザの株は見る見る根もとまで出て来ました。

B すっかり赤い斑《まだら》ができて焼けたようになっていきます。

A(赤ひげの男)さあおれの所ではもうオリザ刈りをやるぞ。

B 主人は笑いながら言つて、それからブドリといつしよに、片っぱしからオリザの株を刈り、

跡へすぐ蕎麦《そば》を播《ま》いて土をかけて歩きました。そしてその年はほんとうに主人の言ったとおり、

ブドリの家では蕎麦ばかり食べました。次の春になると主人が言いました。

A(赤ひげの男)ブドリ、ことは沼ばだけは去年よりは三分の一減つたからな、仕事はよほどらくだ。そのかわりおまえは、

おれの死んだ息子《むすこ》の読んだ本をこれから一生けん命勉強して、いままでおれを山師だといつてわらつたやつらを、

あつと言わせるような立派なオリザを作るくふうをしてくれ。

B そして、いろいろな本を一山ブドリに渡しました。ブドリは仕事のひまに片っぱしからそれを読みました。

ことにその中の、クーボーという人の物の考え方を教えた本はおもしろかつたので何べんも読みました。

またその人が、イーハトーヴの市で一か月の学校をやっているのを知つて、行って習いたいと思つたりしました。

A そして早くもその夏、ブドリは大きな手柄をたてました。それは去年と同じころ、またオリザに病気ができかかつたのを、

ブドリが木の灰と食塩《しお》を使つて食いとめたのでした。

B そして八月のなかばになると、オリザの株はみんなそろって穂を出し、その穂の一枝ごとに小さな白い花が咲き、

花はだんだん水いろの朶《もみ》にかわりました。主人はもう得意の絶頂でした。来る人ごとに、

A (赤ひげの男) なんの、おれも、オリザの山師で四年しくじったけれども、ことは一度に四年分とれる。

これもまたなかなかいいもんだ。

B などと自慢するのです。ところがその次の年はそうは行きませんでした。植え付けのころからさつぱり雨が

降らなかつたために、水路はかわいてしまい、沼にはひびが入って、秋のとりいれはやっと冬じゅう食べるくらいでした。

A 来年こそと思っていましたが、次の年もまた同じようなひでりでした。来年こそ来年こそと思いながら、

ブドリの主人は、だんだんこやしを入れることができなくなり、馬も売り、沼ばたけもだんだん売ってしまったのです。

B ある秋の日、主人はブドリにつらそうに言いました。

A (赤ひげの男) ブドリ、たびたびの寒さと早魃《かんばつ》のために、いまでは沼ばたけも昔の三分の一になってしまったし、

来年はもう入れるこやしもないのだ。「うつつあんばいでは、いつになつてお前にはたらいでもらった礼をするとうつつあてもない。

おまえも若い働き盛りを、おれのこゝで暮らしてしまつてはあんまり気の毒だから、べつかこれでもいい運を見つけてくれ。

B そして主人は、一ふくろのお金と新しい服と赤皮の靴をブドリにくれました。ブドリはいままでの仕事のひどかったことも忘れてしまって、もう何もいらぬから、「」で働いていたいとも思いましたが、

A 考えてみると、いてもやっぱり仕事もそんなにないので、主人に何べんも何べんも礼を言っ
て、六年の間はたらいた沼ばたけと主人に別れて、停車場をさして歩きだしました。

B 四、クーボー大博士。

A ブドリは二時間ばかり歩いて、停車場へ来ました。それから切符を買って、イーハトーヴ行き
の汽車に乗りました。

B 汽車はいくつもの沼ばたけをどんどんどんどんうしろへ送りながら、もう一散に走りました。その向こうには、沢山の

黒い森が、次から次と形を変えて、やっぱりうしろの方へ残されて行くのでした。ブドリは色々な
思いで胸がいっぱいでした。

A 早くイーハトーヴの市に着いて、あの親切な本を書いたクーボーという人に会い、できるなら、働
きながら勉強して、みんながあんなにつらい思いをしないで沼ばたけを作れるよう、

また火山の灰だのひでりだの寒さだのを除くくふうをしたい。

B 汽車はその日のひるすぎ、イーハトーヴの市に着きました。

停車場を一足出ますと、行ったり来たりする自動車に、ブドリはぼうとつつ立ってしまいました。

A やつと気をとりなおして、そこらの人にクーボー博士の学校へ行くみちをたずねました。するとだれにきいても、

B(そこらの人) そんな学校は知らんね。もう五六丁行ってきいてみな。

A とかいうのです。そしてブドリが学校をさがしてたのは、夕方近くでした。

B そのこわれかかった建物の二階で、だれか大きな声でしゃべっていました。

A(ブドリ)こんにちは。こんにちはー。

B ブドリはあらん限り高く叫びました。

A するとすぐ頭の上の二階の窓から、大きな灰いろの顔が出て、めがねが二つぎらりと光りました。

B(クーボー大博士)今授業中だよ、やかましいやつだ。用があるならはいつて来い。

A と、どなりつけて、すぐ顔を引っ込めますと、中ではおおぜいでどつと笑い、

その人はかまわずまた何か大声でしゃべっています。ブドリはそこで思い切って、なるべく足音をたてないように

二階にあがって行きますと、つき当たりの扉があいていて、大きな教室がまっ正面にあらわれました。

B 中にはさまざまな服装をした学生がぎっしりです。

A 向こうは大きな黒い壁になっていて、そこにたくさんの白い線が引いてあり、さっきのせいの高い目がねをかけた人が、みんなに説明しておりました。

B(クーボー大博士)そこでこういっ図ができる。

A 先生は黒い壁へ込み入った図を書きました。学生たちもみんな一生けん命そのまねをしました。ブドリもふところから、いままで沼ばたけで持っていたきたない手帳を出して図を書きとりました。先生はもう書いてしまつて、

壇の上にあつすぐに立つて、席を見まわしています。ブドリも書いてしまつて、その図を縦横から見ているすと、ブドリのとなりで一人の学生が、

B(学生)あああ。

A とあくびをしました。ブドリはそつとききました。(ブドリ)ね、この先生はなんて言つんですか。

すると学生はばかにしたように鼻でわらいながら答えました。

B(学生)クーボー大博士さ、お前知らなかったのかい。

A それからじろじろブドリのようすを見ながら、

B(学生)はじめから、「この図なんか書けるもんか。ぼくでさえ同じ講義をもう六年もきいているんだ。

A と言って、自分のノートをふところへしまつてしまいました。その時教室に、ぱつと電燈がつかまりました。

もう夕方だったのです。大博士が向こうで言いました。

B(クーボー大博士)いまや夕べははるかにきたり、全課をおえた。諸君のうちの希望者は、ノートを示し、

数箇の試問を受けて、所属を決すべきである。

A 学生たちはわあと叫んで、みんなばたばたノートをとりました。それからそのまま帰ってしまうものが大部分でしたが、

五六十人は一列になって大博士の前を通りながらノートを開いて見せるのでした。

B 大博士は一言か二言質問をして、それから白墨でえりへ、「合」とか、「再来」とか書くのでした。ぐんぐん試験が済んで、

いよいよブドリ一人になりました。

A ブドリがその小さなきたない手帳を出したとき、クーボー大博士は、かがんで目をぐつと手帳につけるようにしましたので、

手帳はあぶなく大博士に吸い込まれそうになりました。大博士は、「くっ」と一息をして、

B (クーボー大博士) よろしい。「この図は非常に正しくできている。そのほかのところは、なんだ。」

ははあ、沼ばたけの「やしのこと」、馬のたぐ物のことかね。

では問題に答えなさい。工場の煙突から出るけむりには、どついつ色の種類があるか。

A (ブドリ) 黒、褐《かつ》、黄、灰、白、無色。それからこれらの混合です。

B (クーボー大博士) 無色のけむりはたいへんいい。形について言いたまえ。

A (ブドリ) 無風で煙が相当あれば、たての棒にもなりますが、さきはだんだんひろがります。雲の非常に低い日は、棒は雲まで

のぼって行って、そこから横にひろがります。風のある日は、棒は斜めになりますが、その傾きは風の程度に従います。

波やいくつもきれになるのは、風のためにもよりますが、一つはけむりや煙突のもつ癖のためです。あまり煙の少ないときは、

コルク抜きにもなり、煙も重いガスがまじれば、煙突の口から房《ふさ》になって、一方ないし四方に落ちる事もあります。

B (クーボー大博士) よろしい。きみはどついつ仕事をしているのか。

A (ブドリ) 仕事をみつけに来たんです。

B(クーボー大博士)おもしろい仕事がある。名刺をあげるから、すぐ行きなさい。

A 博士は名刺をとり出して、何かするする書き込んでブドリにくれました。ブドリはおじぎをして、

戸口を出て行くこうとしますと、大博士はちよつと目で答えて、

B(クーボー大博士)なんだ、ごみを焼いてるのかな。

A と低くつぶやきながら、さつき顔を出した窓から、プイツと外へ飛び出しました。

びっくりしてブドリが窓へかけよって見ますと、いつか大博士は玩具《おもちゃ》のような小さな飛行船に乗って、

うす青いもやのこめた町の上を、向こうへ飛んでいるのです。まもなく大博士は、大きな灰いろの建物の平屋根に着いて、

船をつなぐと、建物の中へはいつて見えなくなつてしまいました。

B 五、イーハトーヴ火山局。

A ブドリが、クーボー大博士からもらった名刺のあて名をたずねて、やっと着いたところは大きな茶いろの建物でした。

ブドリは玄関に上がって呼び鈴を押しますと、すぐ人が出て来て、ブドリの出した名刺を受け取り、一目見ると、

すぐブドリを突き当たりの大きな室へ案内しました。

B そこにはいままでに見たこともないような大きなテーブルがあつて、そのまん中に少し髪の毛の白くなった人のよさそうな立派な人が、きちんとすわつて耳に受話器をあてながら何か書いていました。そしてブドリのはいつて来たのを見ると、すぐ横の椅子を指さしながら、また続けて何か書きつけています。

A その室の壁いっばいに、イーハトーヴ全体の地図が、大きな模型に作つてあつて、みんな一目でわかるようになっており、そのまん中を走る背骨のような山脈と、海岸に沿つて縁をとつたようになってる山脈、またそれから枝を出して海の中に点々の島をつつている一列の山々には、かわるがわる色が変わつたりジーンと蝉《せみ》の様に鳴つたり、数字が現われたり消えたりしているのです。

B 下の壁に添つた棚には、黒いタイプライターのようなものが三列に百でもきかないくらい並んで、みんなしずかに動いたり鳴つたりしているのです。

A ブドリがわれを忘れて見とれておりますと、その人が受話器をこつと置いて、ふところから名刺入れを出して、一枚の名刺をブドリに出しながら

B(ペンネン老技師)あなたが、グスコープドリ君ですか。私は「ういうものです。

A と言いました。見ると、「イーハトーヴ火山局技師ペンネンナム」と書いてありました。

B(ペンネン老技師)さつきクーパー博士から電話があったのでお待ちしていました。まあこれから、

「ここで仕事をしながらしっかり勉強して「らんさい。」「の仕事は、去年はじまったばかりですが、

じつに責任のあるもので、それに半分はいつ噴火するかわからない火山の上で仕事するものなのです。

それに火山の癖というものは、なかなか学問でわかることではないのです。われわれはこれから

よほどじつかりやらなければならんです。では今晚はあつちにあなたの泊まる「ところがありますから、

そこでゆつくりお休みなさい。あした「この建物じゆうをすつかり案内しますから。

A 次の朝、ブドリはペンネン老技師に連れられて、建物の中を一々つれて歩いてもらい、様々の機械やしかけを

詳しく教わりました。その建物の中の総ての器械はみんなイーハトーヴじゆうの三百幾つかの活火山や休火山に続いていて、

それらの火山の煙や灰を噴いたり、熔岩を流したりしているようすはもちろん、みかけはじつとしている古い火山でも、

その中の熔岩やガスのもようから、山の形の変わりようまで、みんな数字にあらわれて来るのでした。

B そしてはげしい変化のあるたびに、模型はみんな別々の音で鳴るのでした。ブドリはその日からペンネン老技師について、

すべての器械の扱い方や観測のしかたを習い、夜も昼も一心に働いたり勉強したりしました。そして二年ばかりたちますと、

ブドリはほかの人たちといつしよにあちこちの火山へ器械を据え付けに出されたり、据え付けてある器械の悪くなったのを修繕にやられたりもするようになりましたので、もうブドリにはイーハトーヴの三百幾つの火山と、

その働き具合は掌へたなところの中にあるようにわかって来ました。

A じつにイーハトーヴには、七十幾つの火山が毎日煙をあげたり、熔岩を流したりしているのです。五十幾つかの休火山は、いろいろなガスを噴いたり、熱い湯を出したりしていました。そして残りの百六七十の死火山のうちにも、いつまた

何を始めるかわからないものもあつたのです。ある日ブドリが老技師とやらんで仕事をしておりますと、

にわかにサンムトリという南のほうの海岸にある火山が、むくむく器械に感じ出して来ました。老技師が叫びました。

B(ペンネン老技師)ブドリ君。サンムトリは、けさまで何もなかつたね。

A(ブドリ)はい、いままでサンムトリのはたらいたのを見たことがありません。

B(ペンネン老技師)これはもう噴火が近い。けさの地震が刺激したのだ。この山の北十キロのところにはサンムトリの市がある。

今度爆発すれば、たぶん山は三分の一、北側をはねとばして、牛やテーブルぐらいの岩は熱い灰やガスといっしょに、どしどしサンムトリ市におちてくる。どうしても今のうちに、この海に向いたほうへボーリングを入れて傷口をこきえて、ガスを抜くか熔岩を出させるかしなければならぬ。今すぐ二人で見に行こう。

A 二人はすぐにしたくして、サンムトリ行きの汽車に乗りました。

B 六、サンムトリ火山。

A 二人は次の朝、サンムトリの市に着き、ひるごろサンムトリ火山の頂近く、観測器械を置いてある小屋に登りました。

そこは、サンムトリ山の古い噴火口の外輪山が、海のほうへ向いて欠けた所で、その小屋の窓からながめると、海は青や灰いろの幾つもの縞になって見え、その中を汽船は黒いけむりを吐き、銀いろの水脈《みお》を引いていくつもすべっているのです。老技師はしずかにすべての観測機を調べ、それからブドリに言いました。

B(ペンネン老技師) きみはこの山はあと何日ぐらいで噴火すると思うか。

A(ブドリ) 一月はもたないと思います。

B(ペンネン老技師) 一月はもたない。もう十日ももたない。早く工作してしまわないと、取り返しのつかない事になる。

私は「この山の海に向いた方では、あそこが一番弱いと思う。」

A 老技師は山腹の谷の上のうす緑の草地を指さしました。

B そこを雲の影がしずかに青くすべっているのです。

A(ブドリ) あすには熔岩の層が二つしかない。あとは柔らかな火山灰と火山礫《かざんれき》の層だ。

それにあす「までは牧場の道も立派にあるから、材料を運ぶことも造作《ぞうさ》ない。ぼくは工作隊を申請しよう。

老技師は忙しく局へ発信をはじめました。その時足の下では、つぶやくようなかすかな音がして、

観測小屋はしばらくぎしぎしきしみしました。老技師は器械をはなれました。

B(ペンネン老技師) 局からすぐ工作隊を出すそつだ。工作隊といっても半分決死隊だ。

私は今までに、こんな危険に迫った仕事をした事がない。

A(ブドリ) 十日のつちこでまゐるでしよつか。

B(ペンネン老技師) きつとできる。装置には三日、サンムトリ市の発電所から、電線を引いてくるには五日かかるな。

A 技師はしばらく指を折って考えていましたが、やがて安心したようにまたしずかに言いました。

B(ペンネン老技師)とにかくブドリ君。一つ茶をわかつて飲もうではないか。あんまりいい景色だから。

A ブドリは持って来たアルコールランプに火を入れて、茶をわかしはじめました。空にはだんだん雲が出て、それに日ももう落ちたのか、海はさびしい灰いろに変わり、たくさんの白い波がしらは、

いつせいに火山のすそに寄せて来ました。ふとブドリはすぐ目の前に、いつか見たことのある

おかしな形の小さな飛行船が飛んでいるのを見つけました。老技師もはねあがりました。

B(ペンネン老技師)あ、クーボー君がやって来た。

A ブドリも続いて小屋をとび出しました。飛行船はもう小屋の左側の大きな岩の壁の上にとまって、

中からせいの高いクーボー大博士がひらりと飛びおりにいました。博士はしばらくその辺の岩の

大きなさげ目をさがしていましたが、やっとそれを見つけたと見えて、手早くねじをしめて飛行船をつなぎました。

B(クーボー大博士)お茶をよばれに来たよ。ゆれるかい。

(ペンネン老技師)まだそんなでない。けれども、どうも岩がぼろぼろ上から落ちているらしいんだ。

A ちようどその時、山はにわかにおちたように鳴り出し、ブドリは目の前が青くなつたように思いました。

山はぐらぐら続けてゆれました。見るとクーボー大博士も老技師もしやがんで岩へしがみついていますし、飛行船も大きな波に乗った船のようにゆっくりゆれておりました。

B 地震はやつとやみ、クーボー大博士は起きあがつてすたすと小屋へはいつて行きました。

中ではお茶がひっくり返つて、アルコールが青く燃えていました。

A クーボー大博士は器械をすつかり調べて、それから老技師といろいろ話しました。そしてしまいに言いました。

B(クーボー大博士)もうどうしても、来年は潮汐《ちようせき》発電所を全部作つてしまわなければならない。

それができれば今度のような場合にもその日のうちに仕事ができるし、

ブドリ君が言っている沼ばたけの肥料も降らせられるんだ。

(ペンネン老技師)早魃《かんばつ》だつてちつとも「わくなくなるからな。

A ペンネン技師も言いました。ブドリは胸がわくわくしました。山まで踊りあがっているように思いました。

じつさい山は、その時はげしくゆれ出して、ブドリは床へ投げ出されていたのです。大博士が言いました。

B(クーボー大博士)やるぞ、やるぞ。いまのはサンムトリの市へも、かなり感じたにちがいない。

(ペンネン老技師)今のはぼくらの足もとから、北へ一キロばかり、地表下七百メートルぐらいの所で、

この小屋の六七十倍ぐらいの岩の塊が熔岩の中へ落ち込んだらしいのだ。

ところがガスがいよいよ最後の岩の皮をはね飛ばすまでには、そんな塊を百も二百も、自分の体の中にとらなければならない。

(クーボー大博士)そうだ、僕はこれで失敬しよう。

A と言って小屋を出て、いつかひらりと船に乗ってしまいました。老技師とブドリは、大博士があかりを二三度振って

挨拶しながら、山をまわって向こうへ行くのを見送ってまた小屋にはいり、かわるがわる眠ったり観測したりしました。

B そして明け方ふもとへ工作隊がつかますと、老技師はブドリを一人小屋に残して、きのう指さした

あの草地まで降りて行きました。みんなの声や、鉄の材料の触れ合う音は、下から風の吹き上げるときは、

手にとるように聞こえました。ペンネン技師からはひっきりなしに、向こうの仕事の進み具合も知らせてよこし、

ガスの圧力や山の形の変わりようも尋ねて来ました。

A それから三日の間は、はげしい地震や地鳴りのなかで、ブドリのほづもふもとのほづも

ほとんど眠るひまさえありませんでした。その四日目の午前、老技師からの発信が言って来ました。

B(ペンネン老技師)ブドリ君だな。すっかりしたくができた。急いで降りてきたまえ。観測の器械は一ぺん調べてそのままにして、表《ひょう》は全部持つてくるのだ。もうその小屋はきよつうの午後にはなくなるんだから。

A ブドリはすっかり言われたとおりにして山を降りて行きました。

B そこにはいままで局の倉庫にあった大きな鉄材が、すっかり檣《やぐら》に組み立っていて、いろいろな器械はもう電流さえ来ればすぐに働き出すばかりになっていました。

A ペンネン技師の頬はげつそり落ち、工作隊の人たちも青ざめて目ばかり光らせながら、それでもみんな笑ってブドリに挨拶しました。老技師が言いました。

B(ペンネン老技師)では引き上げよう。みんなしたくして車に乗りたまえ。

A みんなは大急ぎで二十台の自動車に乗りました。車は列になって山のすそを一散にサンムトリの市に走りました。ちよつと山と市とのまん中で、技師は自動車をとめさせました。

B(ペンネン老技師)「こへ天幕《てんと》を張りたまえ。そしてみんなで眠るんだ。

A みんなは、物をひとつとも言えずに、そのとおりにして倒れるようにねむってしまいました。

その午後、老技師は受話器を置いて叫びました。

B(ペンネン老技師)さあ電線は届いたぞ。ブドリ君、始めるよ。

A 老技師はスイッチを入れました。ブドリたちは、天幕《てんと》の外に出て、サンムトリの中腹を見つめました。野原には、

白百合《しらゆり》がいちめんに咲き、その向こうにサンムトリが青くひっそり立っていました。

B にわかサンムトリの左のすそがぐらぐらとゆれ、まっ黒なけむりがぱつと立ったと思うとまっすぐに天までのぼって行って、

おかしなきのこの形になり、その足もとから黄金色《きんいろ》の熔岩がきらきら流れ出して、

見るまにずつと扇形にひろがりながら海へはいりました。と思うと地面ははげしくぐらぐらゆれ、

百合の花もいちめんゆれ、それからごうごうという様な大きな音が、みんなを倒すくらい強くやってきました。

A それから風がごうごうと吹いて行きました。

B やったやった。

A とみんなはそつちに手を延ばして高く叫びました。この時サンムトリの煙は、くずれるように空いっぱいひろがって来ましたが、

たちまちそらはまっ暗になって、熱いこいしがばらばらばら降ってきました。みんなは天幕の中はいつて心配そうにしていますが、ペンネン技師は、時計を見ながら、

B(ペンネン老技師)ブドリ君、うまく行った。危険はもう全くない。市のほうは灰をすこし降らせるだけだろう。

A こいしはだんだん灰にかわりました。それもまもなく薄くなって、みんなはまた天幕の外へ飛び出しました。

B 野原はまるで一めんねずみ色になって、灰は一寸ばかり積もり、百合の花はみんな折れて灰に埋まり、空は変に緑色でした。そしてサンムトリのすそには小さなこぶができて、そこから灰いろの煙が、まだどんどのぼつておりました。

A その夕方、みんなは灰やこいしを踏んで、もう一度山へのぼって、新しい観測の器械を据え着けて帰りました。

B 七、雲の海。

A それから四年の間に、クーボー大博士の計画どおり、潮汐《ちようせき》発電所は、イーハトーヴの海岸に沿って、

二百も配置されました。イーハトーヴをめぐる火山には、観測小屋といっしょに、

白く塗られた鉄の櫓《やぐら》が順々に建ちました。

B ブドリは技師心得になって、一年の大部分は火山から火山と回ってあるいたり、

あぶなくなった火山を工作したりしていました。次の年の春、イーハトーヴの火山局では、

次のようなポスターを村や町へ張りました。

A 窒素肥料を降らせませす。ことしの夏、雨といっしょに、硝酸《しょうさん》《アムモニア》をみなさんの沼ばたけや
蔬菜《そさい》《ばたけ》に降らせませすから、肥料を使うかたは、その分を入れて計算してください。分量は
百メートル四方につき百二十キログラムです。雨もすこしは降らせませす。早魃《かんばつ》の際には、
とにかく作物の枯れないぐらいの雨は降らせることができますから、

いままで水が来なくなって作付《さくづけ》しなかつた沼ばたけも、今年は心配せずに植え付けてください。

B その年の六月、ブドリはイーハトーヴのまん中にあたるイーハトーヴ火山の頂上の小屋にありました。

下はいちめん灰いろをした雲の海でした。そのあちこちからイーハトーヴじゅうの火山のいただきが、

ちよつと島のように黒く出ておりました。

A その雲のすぐ上を一隻《せき》の飛行船が、船尾からまっ白な煙を噴《ふ》いて、一つの峯から一つの峯へ

ちようど橋をかけるように飛びまわっていました。

B そのけむりは、時間がたつほどだんだん太くはつきりなつてしずかに下の雲の海に落ちかぶさり、

まもなく、いちめんの雲の海にはうす白く光る大きな網が山から山へ張りわたされました。

A いつか飛行船はけむりを納めて、しばらく挨拶するように輪を描いていましたが、やがて船首をたれて

しずかに雲の中へ沈んで行つてしまいました。受話器がジーと鳴りました。ペンネン技師の声でした。

B(ペンネン老技師) 飛行船はいま帰つて来た。下のほうのしたくはすつかりいい。雨はとあざあざ降つている。

もうよかろつと思つ。はじめてくれたまえ。

A ブドリはぼたんを押ししました。見る見るさつきけむりの網は、美しい桃いろや青や紫に、

パツパツと目もさめるようにかがやきながら、ついたり消えたりしました。ブドリはまるでうつとりとしてそれに見とれました。

そのうちにだんだん日は暮れて、雲の海もあかりが消えたときは、灰いろかねずみいろかわからないようになりました。

受話器が鳴りました。

B(ペンネン老技師) 硝酸《しょうさん》《アムモニア》はもう雨の中へできてくる。量もこれくらいならちよつといい。

移動のぐあいもいろいろいい。あと四時間やれば、もうこの地方は今月中はたくさんだろう。つづけてやってくれたまえ。

A ブドリはもううれしくつてはね上がりたくらいでした。この雲の下で昔の赤ひげの主人も、

となりの石油がこやしになるかと言った人も、みんなよろこんで雨の音を聞いている。

B そしてあすの朝、見違えるように緑いろになったオリザの株を手でなでたりするだろう。まるで夢のようだと思いながら、雲のまっくらになったり、また美しく輝いたりするのをながめておりました。ところが短い夏の夜は

もう明けるらしかったのです。電光の合間に、東の雲の海のはてがぼんやり黄ばんでいるのです。

A ところがそれは月が出るのです。大きな黄いろな月がしずかにのぼってくるのです。

そして雲が青く光るときは変に白っぽく見え、桃いろに光るときは何かわらっているように見えるのです。

ブドリは、もうじぶんがだれなのか、何をしているのか忘れてしまって、

ただぼんやりそれをみつめていました。受話器はジーと鳴りました。

B)ペンネン老技師(「つちではだいが雷が鳴りだして来た。網があちこちちぎれたらしい。

あんまり鳴らすとあしたの新聞が悪口を言うからもう十分ばかりでやめよう。

A(ブドリ)パンはありませんか。

Bとききました。

A するとそこには三人のはだしの人たちが、目をまっ赤にして酒を飲んでおりましたが、一人が立ち上がって、

B(百姓)パンはあるが、どうも食われないパンでな。石盤《セキパン》だもな。

A とおかしなことを言いますと、みんなはおもしろそうにブドリの顔を見てどつと笑いました。ブドリはいやになって、

ふいつと表へ出ましたら、向こうから髪を角刈りにしたせいの高い男が来て、いきなり、

B(百姓)おい、お前、二どしの夏、電気で「やし降らせたブドリだな。

A(ブドリ)そつだ。ブドリは何げなく答えました。その男は高く叫びました。

B(百姓)火山局のブドリが来たぞ。みんな集まれ。

A すると今の家の中やそこらの畑から、百姓たちがげらげらわらってかけて来ました。

B(百姓)「の野郎、きさまの電気のおかげで、おいらのオリザ、みんな倒れてしまったぞ。何《な》してあんなまねしたんだ。

A(ブドリ)倒れるなんて、きみらは春に出したポスターを見なかったのか。

B(百姓)何の野郎。

A いきなり一人がブドリの帽子をたたき落としました。それからみんなは寄ってたかってブドリをなぐったりふんだりしました。ブドリはとうとう何がなんだかわからなくなって倒れてしまいました。

B 気がついてみるとブドリはどこかの病院らしい部屋の白いベッドに寝ていました。枕もとには見舞いの電報や、たくさんの手紙がありました。ブドリのからだじゆうは痛くて熱く、動く事が出来ませんでした。けれどもそれから一週間ばかりたちますと、もうブドリはもとの元気になっていました。

A そして新聞で、あの子の出来事は、肥料の入れようをまちがって教えた農業技師が、オリザの倒れたのをみんな火山局のせいにして、ごまかしていたためだということを読んで、大きな声で一人で笑いました。

その次の日の午後、病院の小使がはいつて来て、

B(病院の小使)ネリというご婦人のおかたがたずねておいでになりました。

A と言いました。ブドリは夢ではないかと思いましたが、まもなく一人の日に焼けた百姓のおかみさんのような人が、

おずおずとはいつて来ました。それはまるで変わってはいましたが、あの森の中からだれかにつれて行かれたネリだったのです。

B 二人はしばらく物も言えませんでした。やっとブドリが、その後のことをたずねますと、ネリもぼつぼつとイーハトーヴの百姓のことばで、今までのことを話しました。

A ネリを連れて行ったあの男は、三日ばかりの後、めんどつくさくなくなったのか、ある小さな牧場の近くへネリを残して、どこかへ行ってしまったのでした。

B ネリがそこらを泣いて歩いていますと、その牧場の主人がかわいそうに思つて家へ入れて、赤ん坊のお守《もり》をさせたりしていましたが、だんだんネリはなんでも働けるようになったので、とうとう三四年前にその小さな牧場のいちばん上の息子と結婚したというのでした。

A そしてことは肥料も降つたので、いつもなら厩肥《まやごえ》を遠くの畑まで運び出さなければならず、たいへん難儀したのを、近くのかぶら畑へみんな入れたし、遠くの玉蜀黍《とうもろこし》もよくできたので、家じゅうみんなよろこんでいるというふうな事も言いました。

B またあの森の中へ主人の息子といつしよに何べんも行って見たけれども、家はすっかりこわれていたし、ブドリはどこへ行ったかわからないので、いつもがっかりして帰っていたり、きのう新聞で

主人がブドリのけがをしたことを読んだので、やっとうちへたずねて来たという事も言いました。

A ブドリは、治ったらきつとその家へ訪ねて行ってお礼を言う約束をしてネリを帰しました。

B 九、カルボナード島。

A それからの五年は、ブドリにはほんとうに楽しいものでした。赤ひげの主人の家にも何べんもお礼に行きました。

もうよほど年はとっていました。やはり非常な元気で、こんどは毛の長いうさぎを千匹以上飼ったり、

赤い甘藍《かんらん》ばかり畑に作ったり、相変わらずの山師はやっていましたが、暮らしはずうつといいようでした。

B ネリには、かわいらしい男の子が生まれました。冬に仕事がひまになると、ネリはその子に

すっかり子供の百姓のようなかたちをさせて、主人といっしょに、ブドリの家にたずねて来て、泊まって行ったりするのです。

A ある日、ブドリのところへ、昔てぐす飼いの男にブドリといっしょに使われていた人がたずねて来て、

ブドリたちのおとうさんのお墓が森のいちばんはずれの大きな榎《かや》の木の下にあるということを教えて行きました。

B それは、はじめ、てぐす飼いの男が森に来て、森じゅうの木を見てあるとき、ブドリのおとうさんたちの

冷たくなつたからだを見つけて、ブドリに知らせないように、そつと土に埋めて、

上へ一本の樺《かば》の枝をたてておいたというのでした。

A ブドリは、すぐネリたちをつれてそこへ行って、白い石灰岩の墓をたてて、

それからその辺を通るたびにいつも寄ってくるのでした。

B そしてちょうどブドリが二十七の年でした。どうもあの恐ろしい寒い気候がまた来るような模様でした。

測候所では、太陽の調子や北の方の海の氷の様子から、その年の二月にみんなへそれを予報しました。

それが一足ずつだんだん本当になって、こぶしの花が咲かなかつたり、五月に十日もみぞれが降つたりしますと、

みんなはもうこの前の凶作を思い出して、生きたそらもありませんでした。クーボー大博士も、たびたび気象や農業の

技師たちと相談したり、意見を新聞へ出したりしましたが、やっぱりこの激しい寒さだけはどうともできないようすでした。

A ところが六月もはじめになって、まだ黄いろなオリザの苗や、芽を出さない木を見ますと、

ブドリはもういても立つてもいられませんでした。このままで過ぎるなら、

森にも野原にも、ちょうどあの年のブドリの家族の様になる人がたくさんできるのです。

B ブドリはまるで物も食べずに幾晩も幾晩も考えました。ある晩ブドリは、クーボー大博士のうちをたずねました。

A(ブドリ)先生、気層のなかに炭酸ガスがふえて来れば暖かくなるのですか。

B(クーボー大博士)それはなるだろう。地球ができてからいままでの気温は、

たいいてい空気中の炭酸ガスの量できまっていたと言われるくらいだからね。

A(ブドリ)カルボナード火山島が、いま爆発したら、この気候を変えるくらいの炭酸ガスを噴《ふ》くでしょうか。

B(クーボー大博士)それは僕も計算した。あれがいま爆発すれば、ガスはすぐ大循環の上層の風にまじって地球全体を

包むだろう。そして下層の空気や地表からの熱の放散を防ぎ、地球全体を平均で五度ぐらい暖かくするだろうと思う。

A(ブドリ)先生、あれを今すぐ噴かせられないでしょうか。

B(クーボー大博士)それはできるだろう。けれども、その仕事に行ったものうち、最後の一人はどうしても逃げられないのでね。

A(ブドリ)先生、私にそれをやらしてください。どうか先生からペンネン先生へお許しの出るようおとばをください。

B(クーボー大博士)それはいけない。きみはまだ若いし、いまのきみの仕事にかわれるものはそうはない。

A(ブドリ)私のようなものは、これからたくさんできます。私よりもっともっとなんでもできる人が、

私よりもっと立派にもっと美しく、仕事をしたり笑ったりして行くのですから。

B(クーボー大博士)その相談は僕はいかん。ペンネン技師に話したまえ。

A ブドリは帰って来て、ペンネン技師に相談しました。技師はうなずきました。

B(ペンネン老技師)それはいい。けれども僕がやろう。僕はこしもう六十三なのだ。ここで死ぬなら全く本望というものだ。

A(ブドリ)先生、けれどもこの仕事はまだあんまり不確かです。一ぺんうまく爆発しても

まもなくガスが雨にとられてしまうかもしれませんし、また何もかも思ったとおりいかないかもしれません。

先生が今度おいでになってしまつては、あとなんともくふうがつかなくなると存じます。

B 老技師はだまつて首をたれてしまいました。それから三日の後、火山局の船が、カルボナード島へ急いで行きました。

そこいくつものやぐらは建ち、電線は連結されました。

A すっかりしたくができると、ブドリはみんなを船で帰してしまつて、自分は一人島に残りました。

B そしてその次の日、イーハトーヴの人たちは、青ぞらが緑いろに濁り、日や月が銅《あかがね》いろになったのを見ました。

A けれどもそれから三四日たちますと、気候はぐんぐん暖かくなってきて、その秋はほぼ普通の作柄になりました。

B そしてちようど、「」のお話のはじまりのようになるはずの、

A たくさんのブドリのおとうさんやおかあさんは、

B たくさんのブドリやネリといっしょに、その冬を暖かいたべものと、

A 明るい薪《たきぎ》で楽しく暮らすことができたのです。

おわり

参考資料

青空文庫 宮沢賢治「グスコブドリの伝記」テキストデータ